

丸谷 才一 評

スペイン黄金世紀演劇集

牛島信明編訳 (名古屋大学出版会・6000円)

一五一七年、ルターが九五ヶ条の抗議書を発表して宗教改革がはじまる。四〇年、イグナシオ・デ・ロヨラがイエズス会を創立して反宗教改革が盛んになる。プロテスタントは禁欲的で、演劇を弾圧しがちだったが、カトリックは芸術に寛容で、むしろこれを利用してしようとした。諸国のイエズス会学院で演劇と音楽が重視されたのはこのためである。こうしてイエズス会劇が全ヨーロッパ的に上演された。このころ勃興したいわゆるバロック演劇(筋の変転に富み、三一致を尊重せず、悲劇と喜劇を区別しないので、古典主義演劇と対立する)は、イエズス会劇と手をたずさえる形で発展した。

全ヨーロッパ的? いや、全世界的と言うべきか。メキシコの修道尼フアナ・イネス・デ・ラ・クルス(一六四八〜九五)はスペイン・バロック演劇の圧倒的影響下に劇作したし、さらにわが歌舞伎

もまたこの系譜に属するのだから。わたしはかつて、来日した神父たち、欧州に旅した少年使節たちは同時代の西方のドラマをわが国に伝えた、歌舞伎(先行する演劇形態である能とまったく異質)は日本のイエズス会劇に触発されて

人間五十年、夢まぼろしの如くなり

成った、出雲のお国はキリシタンの教会劇を見たのだ、と述べて河竹登志夫の賛同を得たことがある(わたしは知らなかったが、河竹はずでに歌舞伎のバロック的性格を詳論していた)。

お国が京都で歌舞伎踊りを演じ、人気を博した二六〇三年が、イギリス・バロック演劇の代表作『ハムレット』がはじめて刊行された年なのは、象徴的だろう。わが戦国期の人心は、当時の西方の時代精神とよく似ていたから、海

彼の新しい作劇術と演出法を受入れる条件は、すでに整っていた。カフキの語源のカフク(奇矯な服装をする)も、バロックの語源のバロック(歪んだ真珠)も、ともに生命力の過剰による逸脱を意味する。

バロック演劇としての歌舞伎を考える場合、重要なのはスペインだろう。十六世紀、この国はイギリスと覇を争う大國で、十七世紀にかけて、この両世紀を黄金時代ないし黄金世紀と呼ぶ。スペイン演劇は全盛期を迎え、諸国に影響を与えた。日本へのキリスト教布

事家的な喜びもさることながら、わたしは、すくなくともロペ(牛島信明訳)『オルメードの騎士』(二六二〇?)とカルデロン(古屋雄一郎訳)『名譽の医師』(一六三五)の二篇において、戯曲のおもしろさに夢中になってしまったのだ。

前者では他所者の騎士が美しい娘に一目惚れし、取持ち女を介して言い寄り、恋の勝者となるが、恋に敗れた騎士に暗殺される。取持ち女と従僕をあしらうっての喜劇的な一幕から、農夫の不吉な唄を伴う惨劇への急速な転調がすば

らしい腕の冴え。

そして後者では、幕が開くといきなり王の弟が落馬して気を失い、国王が不人情にも弟を置き去りにして旅路を急ぎ、弟である親王が近くの家にかつぎ込まれる。家のなかではちょうど女の人が女奴隷に語っているところ。

『塔から見えたのよ。凜々しい殿方が馬上豊かにやって来て、その足取りの軽やかさときたら、まるで風を切って飛ぶ鳥のよう。殿方は馬を走らせて、そして馬が

躓いた、だからそれまで鳥だったものが地に墮ちて一輪の薔薇になった」

親王が進び込まれ、意識をとり戻すと、愛していた女の別荘にいることを知る。これだけでもいい趣向だが、国王の不人情ぶりがきれいな伏線になる。女人の夫が嫉妬のあまり妻を殺したのを王が容認し、別の女人との再婚を仲介し、さらにもしもまた名譽が汚されたら同じことをしてよいとぞそのかすのが結末なのだ。まことにシニックで無気味な戯曲だが、全体の作りが瀟洒なため、倫理的に咎めることなどわたしにはできない。

この、デカダンスによる人間性への批評は南北あたりを連想させるが、スペイン演劇は二世紀のあいだに途方もない爛熟へと達したのだろう。ロペとカルデロンを生む伝統の花やかさを見ると、このエネルギーが遠く東方に達しても不思議はないという気になる。しかしふたたび言う。状況の一致ということがある。カルデロンは「人生は夢」という題の戯曲を二篇も書いた。そして『閑吟集』に収める小唄にはこうある。「一期は夢よ、ただ狂へ」

日本国憲法の二〇〇日

半藤一利著(プレジデント社・16000円)

敗戦の日、15歳の中学生だった著者が、日本国憲法成立までの日々をGHQが10日間で作った現憲法だ。

池内 紀 評

翅の伝記

た板切れが塔婆だったことを知る。トンボとトウバ。さらにまた大好きな古楽器の曲を聴いていく。曲名にある「トンボ」が「臺」を意味することを知ら